

# 上越植物友の会

上越植物友の会は昭和 50(1975) 年に発会しましたが、その設立趣意書の一節に、「上越のこの地の自然は美しく、そしてそこに育つ植物は、他のいずれの土地よりも豊かであると言ってもよいのではないのでしょうか。このふるさとの自然を愛し、そこに生育する草や木に深い愛着の心をいさぐ、植物同好の士をもって、さらにその趣味を深め、学び、手を取りあって、この上越の自然をいとおしみ、一層その緑を豊かにしてゆきたいものと考えます」とあります。そして会則には、「目的並びに事業」として、

- (1) 植物一般についての会員の関心を高め、知識と技術の向上をはかる。
- (2) 会員相互の親睦をはかり、その教養を深める。
- (3) 緑ゆたかなまちづくりに寄与する。
- (4) 自然にしたしみ緑化運動を進める諸団体および機関に協力する。

などをかかっています。

行事としては、まず4月(時に3月末)・5月・6月・9月・10月に各1回日帰り上越地方の植物観察会を行っています。毎回タイトルまたはテーマを掲げて会員に要項を知らせます。例えば「〇〇に早春の花を観る」、「初夏の湿原に植物を訪ねる」、「〇〇高原に秋の植物を観る」など。10月は毎年「きのこ勉強会」です。

7月の末か8月の初めに、高山植物観察会として1泊2日ないし2泊3日で行かれます。行く所は遠くても登りやすく楽な山を選びます。これまで行った所は、火打山・月山(2回)・木曾駒ヶ岳・秋田駒ヶ岳(2回)・立山・浅間山・八方尾根・白馬岳・高峰山・西穂高と乗鞍・八ヶ岳山麓と霧ヶ峰高原などです。40名程(マイクロバス1台分)の参加募集で、最近希望者が上回る位です。

こうした野外観察会は天候に左右されるので中止したことも度々でした。

初めの頃、シーズンオフに何回か談話会なども行って、講話をきいたり、会員のスライドを観賞したり、植物について種々話し合ったりしましたが、今は行っていません。また「植物の写真展」もデパートの催し場で1回だけ行ったことがあります。

最近春の総会時に草花や苗木の交換会も行い、自分の庭や鉢に植えて楽しんできた山野草木を、株分けやさし木で増やしたものを持ち寄って欲しい人にあげることもしています。そのため総会の出席者(主に女性)が多くなってきました。

それにしても、初めの頃は観察会=採集会くらいに考えて、珍しいものや美しいものなど掘り取ってくるような人もいましたが、毎回採集はやめましょうと呼びかけてきたので、今では当日採集する人はあまり見かけなくなりましたが、まだ徹底しているとは言いきれません(後から採りに行く方もいるとか)。また、単に植物の名前を知ろうとするくらいで、自然の中で花などの美しさをじっくり観賞したり、花や体のつくり、生活の状態や生態系に目を向ける人は多く

はありません。こうしたことから脱着してゆくことが、これからの本会の課題であろうと思われます。

年1回発行される会誌「ろうたす」はB5版、8頁→12頁→16頁とふやし(10号は記念号で20頁)、今年で16号。内容は、会員の研究的な報告やまとめ、植物に関するエッセイや体験記、海外の植物観察記、行事報告記、当年度行事予定、会計(決算・予算)など。なお「ろうたす」はハスの英名 lotusで、高田城跡外堀のハスは、故大賀博士によって東洋一と認められ、有名になったことに因んだものです。

現在会員数 170名程(その約 2/3 は女性)。年会費 1、300円。初代会長平松義尚氏、二代目は矢野孝二氏、三代目の現会長は高橋節也氏、副会長は設立以来、丸山吉夫氏と渡辺弦氏、現事務局長は小川清隆氏。

事務局は上越市大豆 1743 小川清隆方。

(上越植物友の会 山本 明 記)

新潟日報 1991年 2月 6日

## 私の視点

筑木 力  
(新潟大学講師)



「地球にやさしい」という語は自ら付いて、予期しない不評を残した。

か聖教とかを掲げた所作が、その実、浅慮のため不測の結果を招いた事例は歴史に数多い。地球規模で環境破壊対策が叫ばれている一方で、爆撃、軍油流失、大気汚染...などのと謙虚に自問すべきである。

風雲急を告げていた海岸は、表況に胸は痛む。ついに危機から戦争に突入し、球にやさしい...の文意は論議の海となった。人間が正義と...に由来する...にやさしい...の語は自ら付いて、予期しない不評を残した。

昨年大阪で開催された「花の万博」にしても「花と緑と金」が掛かる方を選択し、人間生活をテーマに、地球環境の保全と世界平和の達成への貢献を訴えた善意は評価できる。しかし、結果は花と緑を大量に消費し、最終日には花盗人まで現れる余興まで、また巨大プロジェクトが、企業や行政が行う観光開発の担当当事者は、環境重視の放置したまま、金と技術で自時流に一応配慮して、緑の天然を改造し、環境危機に力ずくで対応しようとする姿勢は、恐ろしく傲慢であって、天祥(てんげん)にかけ、比もそんな愚行を押し進め、較者(けつしや)し、地域振興という大ば、取り返しのつかない自己対策が立てやすい。現実の利害関係が複雑に絡む問題では、各レベルで各自各様の価値判断がせめぎ合い、どんなに話し合っても意見が食い違い、明快な答えが出ない。抽象的な結論には賛成、具体的各論には反対または無関心という様式が、今の環境問題への対応にも見受けられる。そんな折「まず足元の環境問題から問い直そう」と、合成洗剤不使用、再生紙利用などの動きが、市民から企業に至るレベルで出ているが、これを国民運動にまで発展させ、定着させるのは、私たちが果たすべき義務であろう。いま豊かさへのあくなき欲望を、私たちが抑制すべき時期がきているのは確かである。多国籍軍、イラク兩陣営ともこの合意点を根拠にそれぞれの立場で互いに歩み寄るよう努めるしか手立てはない。その際、肝すべき通標は、私たちが地球人全員が環境になるべく迷惑を掛けないで生きる倫理を求める姿勢である。

## 地球に迷惑掛けない生き方を